

國學院大學学術情報リポジトリ

〔談話室〕 「ロシア嫌い」と「社会主義嫌い」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 神長, 英輔, Kaminaga, Eisuke メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000740

「ロシア嫌い」と「社会主義嫌い」

神長英輔

ロシアのウクライナ侵攻は、世界中の人々のロシアに対する感情を悪化させた。ただ、ロシアは世界でも日本でもひさしく嫌われてきた。日本の内閣府の世論調査（二〇二一年九月）で「ロシアに親しみを感じない」との回答は八六・四パーセントだった。一九七八年の調査開始（当時はソ連）以来、日本の人々の「ロシア（ソ連）嫌い」の傾向は変わらない。

ロシアに行ったことがなくても、ロシア人との付き合いがなくても、ロシアを嫌うことができる。人々が抱く「ロシア嫌い」の感情はおもにメディアを通じて構築されている。「ロシア嫌い」の理由を探るにはメディアとそのコンテンツの研究が不可欠だ。

日本における「ロシア嫌い」の傾向には世代によって差がある。「ロシア嫌い」の割合は高齢になるほど高い。冷戦期のソ連は社会主義陣営（東側）の超大国であり、現存した社会主義体制を象徴する国だった。ソ連を知る中高年の「ロシア嫌い」の根は「ソ連嫌い」にあり、しかも（現存した体制としての）「社会主義嫌い」に由来する可能性がある。先日、私はテレビ番組「ウルトラQ」（一九六六年）の再放送（リマスター版）を見た。この番組は「特撮の神様」の円谷英二（一九〇一—一九七〇）が監修し、TBSと円谷プロダクションが制作した特撮SFテレビシリーズである。初放映時の『Q』はほとんどの放送回の視聴率が三〇パーセントを超えた大人気番組だった。

今回見た『Q』の第一七話「1／8計画」^{は本編の}は、当時の「社会主義嫌い」を考えるためのよい手がかりになる。あらすじは次の通りである。舞台は一九六六年の東京。主人公の新聞社カメラマンの女性が街で見かけた「1／8計画」第3

次募集集中」の看板に興味を持ち、調査に行く。「1／8計画」とは、人口問題を解決するために国が国民から希望者を募り、最新の科学技術によって希望者の身体を1／8に縮小し、1／8の縮尺で作られた特殊な居住区で生活させるというプロジェクトである。国はこの居住区を「楽園」と呼び、「縮小された人々の生活はすべて国が保障するので、人々は労働や納税の義務から解放されて遊んで暮らせる」と宣伝した。主人公は自分の意に反して1／8人間にされてしまうが、それが1／8居住区への「不法侵入」と見なされ、主人公は逮捕されてしまう。

冷戦下の「東側」では、地域や時期によって差はあるものの、理想的な社会の建設が目指される中で社会的格差や不平等の是正がそれなりに実現された。その一方、体制を維持するためとして暴力的な抑圧が正当化され、言論の自由などの市民的自由が著しく制約された。『Q』が放映された一九六〇年代半ばの日本社会では「東側」のこうした現実がすでに知られ、現存する社会主義体制への幻滅が広がりつつあった。

こうした状況を反映するように、「1／8計画」では同時代の日本人々が「東側」の現実に対して感じていた不安や不信がアレゴリーとして映像化されている。日本の街並みの中で日本語を話す人々が演じる「楽園」を見て、視聴者は背筋に寒気を覚えたことだろう。

また、この「楽園」は、科学万能への過剰な信頼、伝統的な社会との断絶、行き過ぎた合理主義など、グロテスク化した近代性のディストピアでもある。1／8市民は、氏名の代わりに「便利な」市民番号と呼ばれ、「不平等で争いごとの多い」昔（外の世界）のことは忘れるよう強いられる。こうした点も高度成長による社会の変化に揺さぶられていた人々の不安に共鳴したはずだ。

過去のメディアコンテンツの中には、過去の人々の感情の痕跡がさまざまな形で残されている。冷戦の終了やソ連の解体からすでに三十年以上が経ち、冷戦期は同時代ではなく、現代史研究の対象になった。冷戦期は電子メディアが爆発的に成長した時期でもある。私は『Q』の経験から、過去のテレビ作品が重要な史料になりうることを改めて強く感じた。

（ロシア近現代史・東北アジア近現代史・日露交流史）